

350) 雨音

雨音のすき間から 忍び込む君の声
目を開けて気がつく^あと うたた寝の空耳^{そらみみ}よ
五月雨の音だけが 窓をうつ昼下がり
君といた懐かしい^{なつ} あなころを思い出す

雨音のすき間から 忍び込む君の声
透き通るその声と 挨拶を交わした日
やがて来る愛の日の よろこびを予感して
運命のざわめきを 何となく感じてた

雨音のすき間から 忍び込む君の声
その声に目を覚まし その声に送られて
毎日が目眩^{まぶし}くて 輝きにみちていた
あなころは別れなど 来るはずもなかったが

雨音のすき間から 忍び込む君の声
夢の中ありありと おもかげ^{おもかげ}面影がよみがえる
心ではいつの日も 君のこと愛してる
懐かしいあの日々に 帰るべき道はない

雨音のすき間から 忍び込む君の声
心ではいつの日も 君のこと愛してる

→